



地理資料シリーズ

大久保路上言語地図

【作成動機】 この地図は高校1年の夏休みの課題作品だったが、構想は中3の時にした。その春僕は東京都のJR大久保駅周辺に引越し、耳目に入る外国のことが多くて驚いた。また当時、興味あるテーマを選択する「テーマ学習」の授業で「共生」を選び、群馬県邑楽郡大泉町（日系ブラジル人がこの十数年で急増している）を訪ねる機会があった。

大久保地域にも大泉町にも外国人が多く住む。住民登録中の外国人の割合は、大久保で約20%、大泉町で約15%である。しかし、両方を歩き、日本語教育の事情や文化間の軋轢を取材し、違いを感じた。

大泉町では小さなブラジルが建物単位で点在し、他の部分は典型的な日本の地方都市の郊外と変わった様子がないのに対し、大久保地域では町のどこでも他文化の存在が当然になっている感じがした。

この原因を考察して自分の学習として発表した。すると「そもそもこの二つの地域が違うのかどうか分からない」と指摘された。そこで大久保の性質を表現する手段としてこの地図を考えた。

外国語の看板（日本語がないものも多い）は相当数の住民がその言語を理解し、また店主が地域社会に対して自分の民族の存在を公にしている証拠だ。自ずと、構想段階から看板の写真は必須だった。見る人に「大久保の雰囲気」を感じてほしかった。二人の友人に話したら興味を持って参加してくれたので、一般に関心の高いテーマかも知れないと思った。（平井）

【調査】 夏休み中の午後を使って3回、延べ約10時間の調査をした。デジタルカメラと地図と調査表とを3人で持って対象地域の道路を歩き尽くした。

外国語の看板を見つけるたび、地図に番号を記入し、デジタルカメラで写真を撮り、どの番号がどの写真だと判別できるよう調査表に記入した。

【作図】 調査時に修正を加えた地図に従い道路・線路・

【写真解説】 道から見える外国語の看板を地図上のシールで表した。色が言語を表している。複数の言語が書いてある看板は、シールを等分してそれぞれの色を貼った。日本語も含まれている看板は、中央に小さな白シールを貼っている。右上の「統計」は各言語の看板の数の集計である。ベン図のように、色で囲まれた数字が、その言語の看板の数と一致している。さらに、地図の周りに写真を貼ることで、業種が分かるようにし、また、ダイレクトに「外国人の多い町」を印象づけようとした。シール上と写真の傍らに同じ番号を振って、対応を示している。

（地図作製 筑波大学附属駒場高等学校 太田豊史雄・瀬尾拓史・平井洋一）
 <この地図は旭川の第11回「環境地図作品展」で優良賞を獲得しました>

駅を描いた。外国語の看板の場所にシールを貼った。シールは言語別に色分けし、調査時につけた番号を書き込んだ。また地図の余白に写真を貼りつけ、シールと同じ色で縁取りし、番号を添えた。

【反省点】 1)シールと写真との関連づけを見るとき番号と色だけしか手がかりがない。2)色と言語の対応表が集計表から遠く離れていて、ラベル「統計」の意味が大変わかりにくかった。ともに全体のレイアウトの吟味が足りないということである。

【解説】 言語別に見ると圧倒的にハングル文字が多い。この地域に戦後すぐから在日韓国・朝鮮人が集中していたからだろう。その分布を見ると、表通りだけでなく1本入った3m幅道路にもハングルの看板は多く見られる。これは地域全体に韓国・朝鮮半島由来の文化が広がっている証拠だと思う。

職種別に見ると、飲食店がほとんどだったが、質屋や医者も外国語の看板を掲げていた。また、ゴミ捨て規則の掲示も多言語で書かれていた。まず生活基盤から多言語化が進んでいるのだろう。

【感想】 作成から1年を経てこの地図を見返すと、じつに意味深長なデータを採取したのだと再確認できた。2002年は日韓が一体となりワールドカップを開催した、両国の歴史に刻み込まれるべき年である。

この地図からも分かるように、「日本」と「朝鮮半島（韓半島）」は、切っても切れない関係で結びついている。外国語のほとんどが韓国語であったことは、色覚的な表現を用いたこの地図でより鮮明に分かるだろう。
 （上記地図作製者）

【まとめ】 本校では中学1年生から環境地図づくりに取り組んでいる。中学では表面的な事象の表現が多いが、高校になると、深い動機によって作成された作品も見られる。国際化をテーマとした地域調査のまとめとして地図は有効な手段といえる。（地理担当 大野）